

発掘調査報告第32集

平成4年度山田遺跡第2次緊急発掘調査報告

# 山 田 遺 跡

(第2次調査)

1993.3

駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第32集

平成4年度山田遺跡第2次緊急発掘調査報告

# 山 田 遺 跡

(第2次調査)

1993.3

駒ヶ根市教育委員会

## 序 文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、駒ヶ根市東伊那に所在する山田遺跡の第2次緊急発掘調査の報告書であります。

山田遺跡は赤石山脈、伊那山脈を背にし、眼下に天竜川を臨み、遠く木曽山脈の峰々を一望のうちに眺めることができる場所にあった縄文時代中期の集落跡であります。

現在の東伊那地区にある山田遺跡・狐くば遺跡・丸山遺跡・殿村遺跡は、総称して「伊那村遺跡」と呼ばれていましたが、昭和25年から26年にかけて伊那村遺跡の発掘調査が実施され、山田遺跡の第1次発掘調査はこの時に行われました。本遺跡は当地方でも最も早い時期に学術調査がなされた記念すべき遺跡の一つです。東伊那地区は合併して駒ヶ根市となる前は伊那村であります。当時の伊那村が文化財保存会を組織して調査の運営にあたり国学院大学の大場磐雄先生を調査委員長に、市村威人先生、一志茂樹先生、そして東京大学から藤島亥治郎先生を指導者として迎え、地元の諸団体の協力により第1次調査が行われました。

この後、藤島先生と友野良一先生の設計によって、発掘された住居址のうち2棟の上屋が復原され、遺跡のある一帯が上の原と呼ばれていることから地域の人からは「上の原遺跡」と呼ばれ長年親しまれて来ました。昭和40年にこの復原住居は老朽化のために取り壊されましたが、平成3年度に「ふるさとの丘」の整備に際し、市教育委員会で再度復原をしました。

今回の第2次発掘調査では、第1次調査で地元の主力として活躍された友野先生に調査団長をお願いして調査しましたところ、狭い範囲ながら住居址5軒が検出され、第1次調査で発見された6軒の住居址とともに当遺跡での縄文時代中期集落のあり方を探る上で貴重な資料となり、今後の研究上重要な役割を果たすものと考えております。

発掘調査を行うにあたり深いご理解をいただいた地権者はじめ、炎天下の中調査に従事していただきいた調査団の皆さん等、多くの方々のご協力、ご厚志により無事所期の目的を果たすことができました。ここに関係者の皆さま方に必から感謝申し上げますとともに、この報告書が地域史研究の一助とならんことを念願する次第であります。

平成5年3月31日

駒ヶ根市教育長 高 坂 保

## 例　　言

- 1 この報告書は、個人住宅建設に伴い平成4年度に実施した山田遺跡第2次発掘調査の報告書である。山田遺跡は昭和25・26年の第1次発掘調査が行われており、今回の調査はこの第1次調査に次ぐ第2次の発掘調査である。
- 2 発掘調査は市の委託を市教育委員会が組織する駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が受け、山田遺跡第2次調査団を編成し調査にあたった。
- 3 本報告書は遺構及び遺物をより多く図示することに重点を置き、資料の詳細な検討は後日の機会に委ねることとした。
- 4 本報告書をまとめるにあたっての作業分担は以下のとおりである。

土器復原	木下平八郎、竹村章子、宮下伸二
復元土器実測	北澤武志、
復元土器実測トレース	宮下伸二、
土器断面実測及び採拓	竹村章子、
石器実測及びトレース	宮下伸二、
遺構図トレース	宮下伸二、

- 5 写真撮影は遺構の撮影を友野良一、北澤が行い、遺物の撮影は木下が行い焼き付けを含め写真図版の編集は木下が行った。
- 6 本報告書の執筆は北澤があたり、編集は木下、北澤があたり友野が監修した。
- 7 本報告書中の出土土器の挿図は第III章の後にまとめて編集してある。
- 8 遺物及び実測図等調査に伴う関係資料は駒ヶ根市立博物館（長野県駒ヶ根市上穂栄町23番1号）に保管してある

## 目 次

### 序 文

### 例 言

### 目 次

#### 挿図目次

#### 図版目次

#### 第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
第 2 節 発掘調査の組織.....	1
第 3 節 発掘調査経過.....	2

#### 第 II 章 遺跡の環境

第 1 節 位置及び地形・地質.....	3
第 2 節 歴史的環境.....	7

#### 第 III 章 発掘調査

第 1 節 発掘調査の方法.....	9
第 2 節 時期区分について.....	9
第 3 節 造構と遺物.....	11
第 IV 章 まとめ.....	36

## 挿 図 目 次

第 1 図 山田遺跡位置図.....	4
第 2 図 発掘調査区及び周辺地形図.....	5, 6
第 3 図 山田遺跡及び周辺遺跡位置図.....	8
第 4 図 第 2 次発掘調査造構全体図.....	10
第 5 図 第 1 号住居址実測図.....	11
第 6 図 第 1 号住居址出土石器.....	12
第 7 図 第 2 号住居址実測図.....	13
第 8 図 第 2 号住居址出土石器.....	14
第 9 図 第 3 号住居址実測図.....	15

第10図	第3号住居址出土石器	16
第11図	第4号住居址実測図	17
第12図	第4号住居址覆土状況	18
第13図	第4号住居址出土石器1	20
第14図	第4号住居址出土石器2	21
第15図	第5号住居址 1・2・3号上塙実測図	22
第16図	第1・2・4号住居址出土土器	23
第17図	第4号住居址出土土器1	24
第18図	第4号住居址出土土器2	25
第19図	第4号住居址出土土器3	26
第20図	第5号住居址・遺構外・第4号住居址出土土器	27
第21図	第1・2号住居址出土土器	28
第22図	第2・3号住居址出土土器	29
第23図	第4号住居址覆土上層出土土器	30
第24図	第4号住居址覆土中層出土土器1	31
第25図	第4号住居址覆土中層出土土器2	32
第26図	第4号住居址覆土下層出土土器	33
第27図	第4号住居址覆土下層・第5号住居址出土土器	34
第28図	土塙・遺構外・表面採集出土土器	35

## 図 版 目 次

- 図版1～2 調査前状況、住居址群  
 図版3～9 第1～5号住居址出土状況  
 図版10 1～4号土塙出土状況  
 図版11～21 出土土器  
 図版22～24 出土石器

# 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘調査に至るまでの経過

平成4年6月、ふるさとの丘の南側で個人住宅造成中に土器片等が出土したとの連絡があり、直ちに市教育委員会では現場へ行き確認を行った。現場はこれまで遺跡分布域としてとらえられている範囲の境界付近にあたり、出土土器は第1次発掘調査で出土した土器と同じく縄文時代中期後半のもので、山田遺跡集落と密接な関係があると予想された。県教育委員会に連絡し、その後現場で簡単なトレンチを入れて確認したところ住居址の落ち込みを認め、工事を一時中断してもらい、山田遺跡第2次発掘調査を緊急に実施することとなった。

調査は駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととなり、山田遺跡第2次発掘調査団を組織し、団長には友野良一氏をお願いして平成4年7月13日より調査に入った。

## 第2節 発掘調査の組織

### 〔駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会〕

顧問	林 朝昭	(駒ヶ根市教育委員長)
会長	高坂 保	(駒ヶ根市教育長)
理事	友野 良一	(駒ヶ根市文化財審議会会长)
"	松村 義也	( " 副会長)
"	竹村 進	( " 委員)
"	林 越	( " "
"	吉江 修深	( " "
"	新井 徳博	( " "
"	河合 龍夫	(駒ヶ根市生涯学習課長)
"	福沢 正浩	(駒ヶ根市立博物館館長)
監事	宮脇 昌三	(駒ヶ根郷土研究会会长)
"	下平 基雄	(駒ヶ根市役所)
幹事	市村 重実	(駒ヶ根市生涯学習課課長補佐)
"	中村 敏郎	( " 生涯学習係)
"	北原 純	( " "
"	北澤 武志	(駒ヶ根市立博物館)
"	白沢 由美	( " 嘱託)

〔山田遺跡第2次発掘調査団〕

調査団長 友野良一（日本考古学協会会員）発掘担当者  
調査主任 北澤武志（長野県考古学会会員）  
調査員 木下平八郎（東洋陶磁学会会員、市臨時職員）整理  
〃 小町谷元（上伊那考古学会会員）  
参加者 渋谷鉄雄、羽生正吉、小林満寿子、細田律恵、竹村章子  
宮下伸二、小田切守正、竹村俊文、池上純子〔敬称略・順不同〕

### 第3節 発掘作業経過

- 7月13日(月) 午後、器材運搬、調査方法等打合わせ。
- 7月15日(水) テント設営。ベンチマーク設定。造成による断差断面整形。
- 7月16日(木) 断差部の断面実測と写真撮影。表土除土及び表面遺物取り上げ。
- 7月17日(金) 遺物を適宜取り上げつつ全体の表土除土。
- 7月20日(月) 1号住を掘り下げて炉、柱穴を検出。住居址内床全面に炭、焼土が認められる。
- 7月21日(火) 1号住内部調査。2号住南半掘り下げ。4号住プランの確認。長野日報・駒ヶ根毎日新聞社の取材がある。
- 7月22日(水) 1号住柱穴の実測と写真撮影。主柱穴の掘り込みは平面で梢円形となる。2号住掘り下げ炉を確認。4号住掘り下げ、上層で多量の土器片出土。遺物取り上げをして行く。
- 7月23日(木) 5号住で埋甕、周溝確認。1号土塙掘り下げ。
- 7月24日(金) 1号住は周溝調査後清掃し写真撮影。5号住の埋甕及び柱穴調査。1～3号土塙掘り下げ。2号住を掘り下げつつ遺物取り上げ、南側で埋甕検出。有線放送の取材がある。
- 7月25日(土) 2号住ベルト断面実測。4号住覆土より釣手土器破片出土。3号住の掘り下げを開始するが他の住居址に比べ掘り込みが浅い。遺物取り上げ。
- 7月27日(月) 3、4号住掘り下げ。4号住は覆土から多量の土器片が出土し廃棄と思われる。2号住で埋甕調査。
- 7月28日(火) 4号住の南側にもう1軒の住居址があると思われるが、調査区の制約により詳細は不明である。3号住掘り下げ完了。
- 7月29日(水) 4号住覆土中層にローム土層があり、確認のため南北にサブトレーンチを入れる。床面上で形の残る土器が逆位で出土。
- 7月30日(木) 4号住サブトレーンチ断面実測及び写真撮影及び中層ロームのレベル測定。4号住

の西側は覆土中に石が多く落ち込んでおり、実測後取り除く。

- 7月31日(金) 4号住調査。遺物位置実測。
- 8月1日(土) 午前中のみ。4号住のベルトをはずす。前日の床面出土土器の周囲には大型土器の頸部が取り囲む形で出土した。
- 8月3日(月) 午前中、三重県四日市市教育委員会の春日井氏、愛知県清州町教育委員会の野口氏見学。午後から作業。4号住調査。1・2号土塁と2号住の写真撮影。
- 8月4日(火) 3号土塁の写真撮影。4号住覆土内石を実測後除き床面まで掘り下げる。入口部で埋甕を、炉の近くで5cm大の石を使用した集石を検出する。柱穴調査実施。
- 8月5日(水) 4号住床面上遺物の取り上げ。集石調査。P3の脇のピット中から小型の伏甕出土。
- 8月6日(木) 4号住炉の断面実測及び造構平板実測開始。埋甕の両脇に小ピットを検出。1・3・4号住及び造構全体の写真撮影。各住居址の埋甕外側を半カット。
- 8月7日(金) 1~3号土塁、4・5号住居址の平板実測。埋甕は埋設状況実測後取り上げる。午後は第1次調査第1・3号住居址内の屋内施設復原が市教育委員会によって行われ、調査団も協力した。
- 8月8日(土) 2・3号住平板実測及び調査区全体のレベル測定。テントのかたつけを行い、本日で現場作業を終了する。

## 第II章 遺跡の環境

### 第1節 位置及び地形・地質(第1・2図)

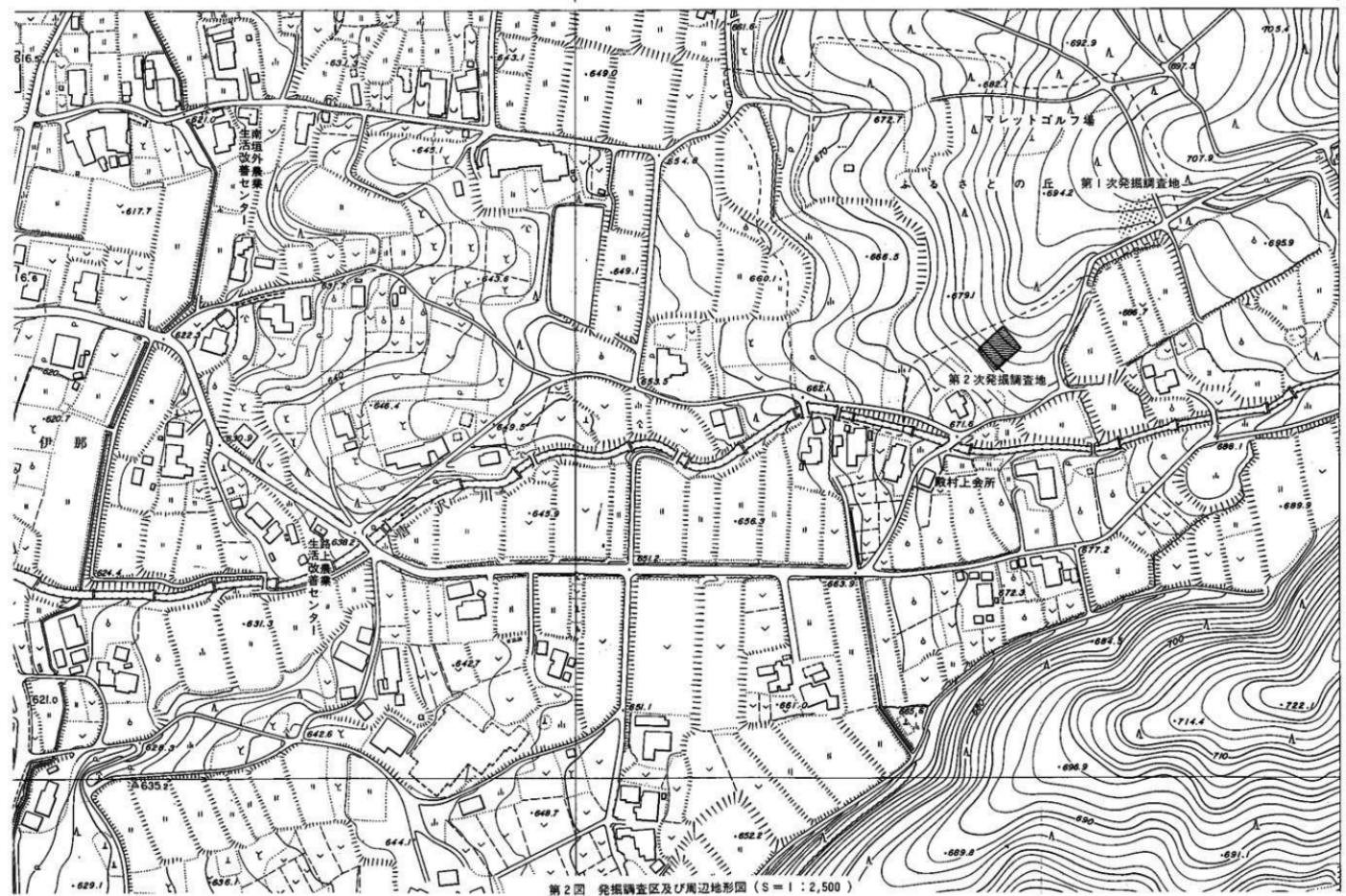
当遺跡は長野県駒ヶ根市東伊那の山田地籍に所在する。JR飯田線駒ヶ根駅より東へ約2.3kmに位置し、市の「ふるさとの丘」の東側一帯が遺跡となっている。第1次発掘調査が行われた場所はふるさとの丘のマレットゴルフ場内にあり、昭和25・26年頃の調査で掘られた住居址やトレッセの跡が窪みとなって残っていた。今回の調査区はこの第1次発掘調査区から南西方向へ約100m離れた場所で、ふるさとの丘駐車場の東に位置している。標高は第1次発掘調査区で690~695mで、今回の第2次発掘調査区が680~685mで、天竜川との比高は120~125m程度となる。

地形的には天竜川左岸の河岸段丘高位面を、伊那山脈から流れ出て天竜川へと注ぐ唐沢川が開折し形成する扇状地の扇頂部付近の山麓地域に立地している。

付近の地形では、調査区は東から西へと伸びる尾根の上にあり、南側に唐沢川が流れ、北側は地元の人人が「こうろじくぼ」と呼ぶ小谷となっている。この谷の上部(東)一帯が山田遺跡の集



第1図 山田遺跡位置図 ( $S = 1 : 50,000$ )



第2図 発掘調査区及び周辺地形図 ( $S = 1 : 2,500$ )

落趾として知られていた地域である。谷の下部には山田の富士塚と下堤があり、ふるさとの丘の西側には井筋である「上井」が北から南へと流れ、ふるさとの丘の北側には北沢と呼ばれる小沢が東へと流れている。調査区は以前には開墾され畑として利用されていたとのことであるが、その後樹木が茂り、造成前は雑木林となっていた。

当地域の地質は厚い基盤礫層の上に、主に御岳噴火によるテフラが載る形となるが、特に東伊那地区は御岳第1軽石層（Pm-I）の堆積が厚い地域である。調査区の西側はPm-I層の白土を採掘した場所であり、調査区のすぐ西と北西部は表土下がPm-I層となっている。Pm-I層の下は青灰色あるいは淡茶褐色の粘土層があって不透水層となっている。Pm-I層より上は火山灰の堆積したローム層であり、住宅造成による段差断面ではハードローム層中にPm-IV粒の包含層が40cm幅で入っていることを観察できた。Pm-IV層が残っていることから調査区の下層にはPm-I層も残っているものと思われる。ハードロームの上はソフトロームが約50cm堆積し、表土（魔しょく土）の厚さは30~40cm程度であった。遺構はローム層を掘り込んで作られている。

付近に見られる岩石は天竜川東に特有の圧碎作用を受けてもろい花崗岩と縞状片麻岩（砂岩）がほとんどであった。

## 第2節 歴史的環境(第3図)

東伊那地区の河岸段丘上は、小河川が開削した丘陵状地形が発達するとともに各時代の遺跡が数多くあり、大正末年発行の「先史及び原始時代の上伊那」にも多くの遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡は、当山田遺跡(1)の外、殿村(5)、反目南(9)、反目(11)、大久保(14)、青木北(22)などが知られている。伊那盆地では縄文時代中期後半に遺跡数が爆発的に増加し、大規模な集落が営まれる点で特徴的である。また青木北遺跡では縄文時代後期の環状配石址群が発見され貴重な資料である。

弥生時代の遺跡は、丸山(2)、孤くぼ(4)、殿村(5)、城村城(7)、反目南(9)、遊光(10)、善込(17)、栗林神社東(18)などがある。栗林神社東遺跡からは弥生時代後期中島式の大型壺形土器が良好な形で出土している。

古墳時代から平安時代にかけての遺跡は、殿村(5)、反目南(9)、遊光(10)、反目(11)、上塙田(19)、などがある。古墳は東伊那地区に少なくとも3基の円墳があったとされるが、いずれも消滅してしまっている。

また天竜川左岸はその立地条件を生かした中世城館址が多いことで知られ、原城(3)、稲村古城(6)、稲村城(7)、遊光城(8)、高田城(12)、大久保城(13)、城村古城(15)、城村城(16)、青木城(20)、塙田城(23)、があり、遊光遺跡では陸屋根式の住居址が発掘されている。

山田遺跡については過去に調査が行われているので、その概要についてここで述べておくこと



- 1.山田 2.丸山 3.原城 4.狐くぼ 5.殿村 6.稻村古城 7.稻村城  
 8.遊光城 9.反目南 10.遊光 11.反目 12.高田城 13.大久保城  
 14.大久保 15.城村古城 16.城村城 17.善込 18.栗林神社東  
 19.上塙田 20.青木城 21.青木 22.青木北 23.塙田城

第3図 山田遺跡及び周辺遺跡位置図 ( $S = 1 : 25,000$ )

とする。

天竜川の河岸段丘の第2段丘上に殿村遺跡があり、第3段丘上に孤くは遺跡が、さらに東に広がる扇状地上には丸山遺跡があり、山麓部に山田遺跡が分布しているが、以上の4遺跡は合併する前の伊那村が昭和25・26年に発掘調査を行っており、総称して「伊那村遺跡」と呼称されている。昭和23~24年にかけては一帯の表面採集が行われ、昭和25年に宮坂英夫氏に指導を受け友野良一氏等により山田遺跡第1号住居址の発掘が行われた。さらに昭和26年には大場磐雄氏を調査委員長とする伊那村遺跡第1次調査が実施され、山田遺跡では住居址6軒、小堅穴址4基が発掘されたと報告されている。出土土器を概観すると他の時代のものも混ざっているが、縄文時代中期後半の土器がほとんどを占め、この時期の住居址と思われる。

また平成2年に市教育委員会が、「ふるさとの丘」造成に先立ち、遺跡の分布域外ではあったが、「アルブスドーム」と「ふるさとあゆみ館」建設予定地で分布調査を実施している。ふるさとあゆみ館予定地では4点の遺物出土のみで、アルブスドーム予定地では遺物は上部からの流れ込み土層に包含されており、いずれも遺構は発見されなかった。

### 第III章 発掘調査

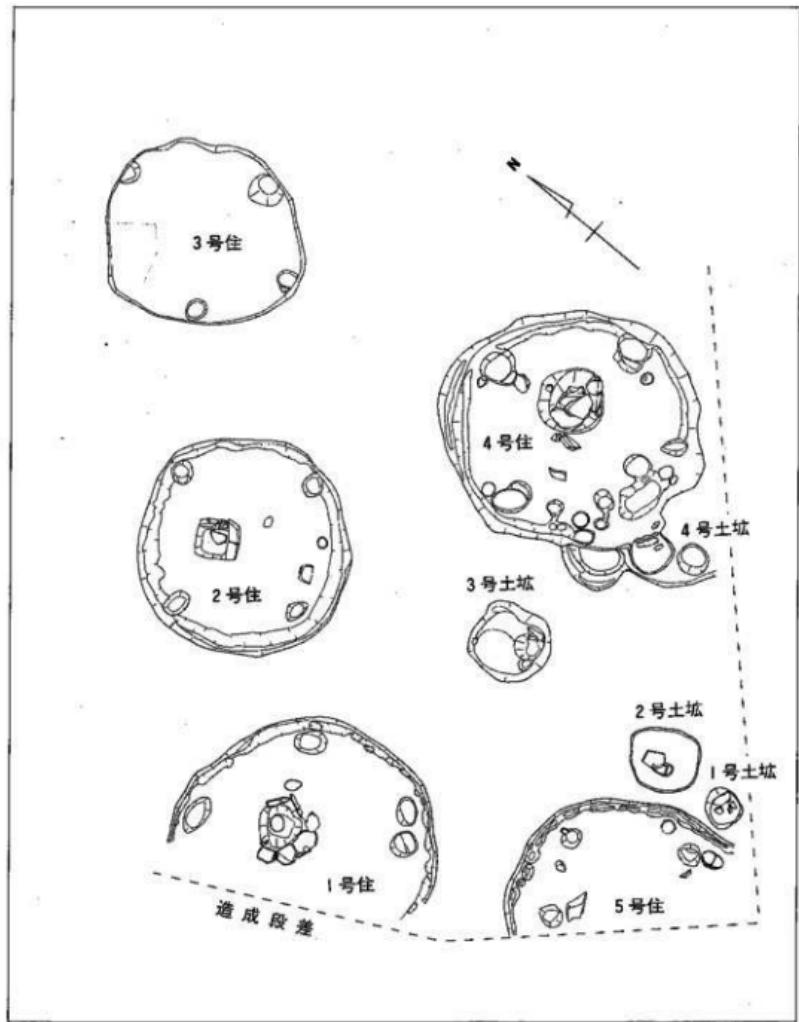
#### 第1節 発掘調査の方法(第4図、図版1~2)

調査前の状況は、西側で住宅に伴う駐車場造成のため切土となった所で第1・5号住居址の西半が切られていたが、東側の住宅造成地は抜根と土の移動を始めた所であったため、表層の攪乱はあったものの遺構面は残されていた。調査に入る前に簡略なトレントを遺物出土の多い場所に入れて、落ち込みにより3~4軒の住居出土を想定し発掘調査を開始した。

発掘調査は21.6×16.8m、面積約363m<sup>2</sup>の範囲で、住宅建設予定地のほぼ全面について行ったが、西側は白土採掘によりPm-I層が上層に現われていたため調査対象より除外した。また住宅造成地より東側は抜木が行われていたが、地形の変更はないということで今後も現状保存するものとした。掘り下げはローム面までとして、表土除土後に遺構を掘り下げ内部の調査を行った。住居址、土塙の表記は第1次発掘調査からの連番とせず、今回検出した遺構の中で順に番号を付して使用している。

#### 第2節 時期区分について

縄文時代中期後半の土器編年については先駆的研究があるが、依然として地域差、系統的変化、他地域との関連性等々不明な点が残されている。本稿では編年案が整理されている米田明訓氏の編年(米田1980)第I段階~第V段階をI期~V期として、時期区分として使用するものと



第4図 第2次発掘調査遺構全体図 ( $S = 1 : 120$ )

する。ただしこの編年は他土器型式との対比による時期区分であるので、I期とII期とが系統的に分離できる点については田中清文氏の指達（田中1984）のとおりであろう。

今回の調査によって出土した土器はII～III期のものがほとんどで、一部中期中葉の土器が見られた。II期とIII期との区分については、大略次のようにとらえた。

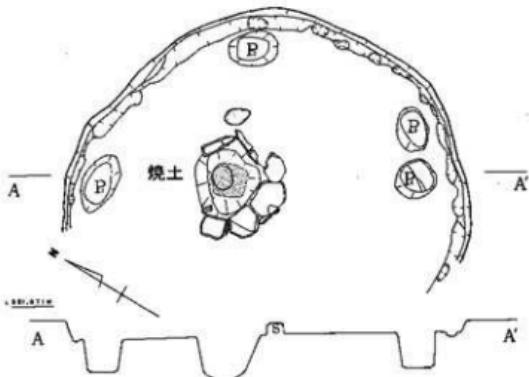
I期 東北の大木式と同じく、3本を基調とする平行沈線で胴部文様を描く土器が見られる時期で、地文は繩文、縦の細条線や細かい緩杉文などが使用される。腕骨文もこの時期から使用される。I期の隆帯による装飾を踏襲する大型深鉢も見られる。

II期 大柄な渦巻文を平行する2条の隆帯貼り付けと隆帯脇を3本の沈線でなぞる手法で表わした土器が盛行する時期。東海地方の影響を受けた土器や、加曾利E式類似土器等見られるものの、地域の独自性がより強い時期と言える。

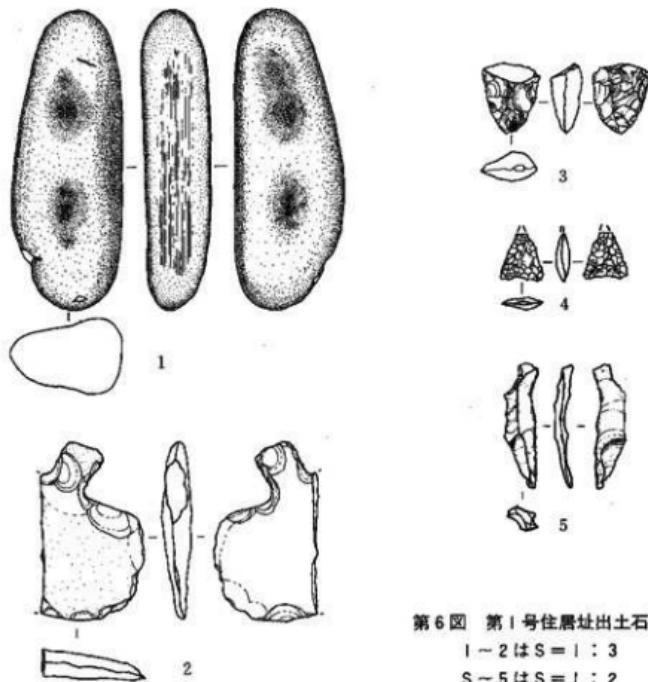
### 第3節 遺構と遺物

#### (1) 第1号住居址 (第5～6・16・21図、図版3・11・16・22・24)

調査区西隅にあり、第2号住居址の南西、第5号住居址の北西に位置する。西側半分は造成工事のため壊されていた。プランは隅丸の五角形になるとと思われ、規模は南北で5.4mである。壁高は東で25cmあり西へ行くとほとんど段差が無くなる。炉は中央北寄りにあり掘炬鍵状石囲炉である。掘り込みは50cmで平板な割石を立てて使用しているが北側の石は抜き取られており、南側は焚口として2枚の石を平らに敷いている。柱穴はP1～4までが残っているが、いずれも深さ50cm程で平面では橢円形の掘り込み形となる。柱穴中は上半分の埋土に炭粒が認められた。床面には一面に薄く炭と焼土が見られた。



第5図 第1号住居址実測図 ( $S = 1 : 80$ )



第6図 第1号住居址出土石器

1～2はS=1:3

3～5はS=1:2

出土石器は第6図中1が硬砂岩製の凹石で表裏4箇所に凹部分があり側面には磨痕がある。2は硬砂岩製の粗製石匙で刃部が半分欠損している。3～4は黒曜石製で、3は石核、4は石錐、5は綾長の剥片に刃部加工を施した石器である。

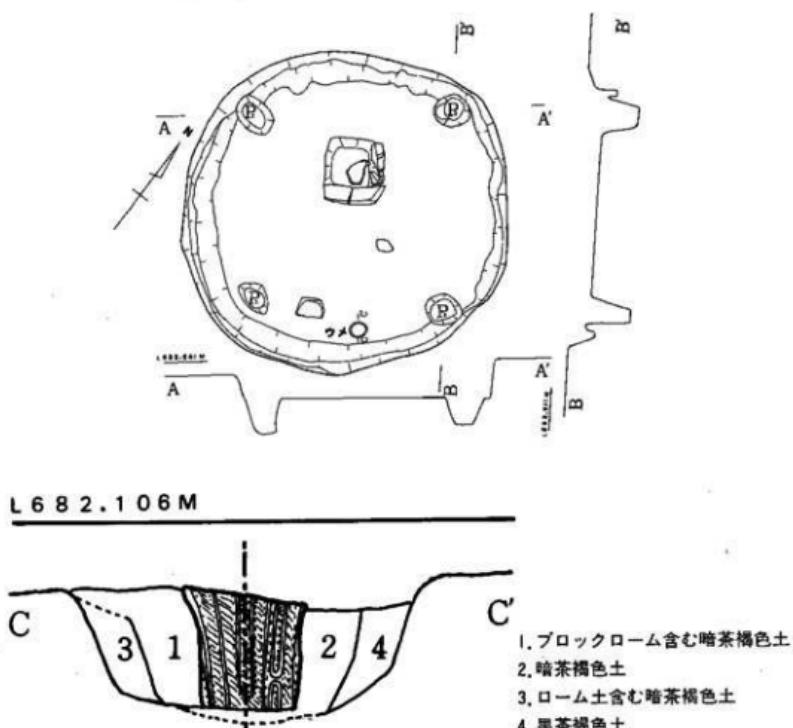
出土土器は当住居址では東半のみのためか少なかった。第16図中1の小型土器はP2柱穴から出土で4単位の波状口縁をもち、胴下部でふくらみ底部ですぼまる形となると思われる。

文様は波状口縁の下の口縁部と頸部に渦巻を配する連続入組文を沈線で描き、地文は雑な縄文である。第21図中1～5の土器片は覆土からの出土である。2は縄文時代中期後半Ⅲ期、3はⅡ期で、住居址の所属時期はⅡ～Ⅲ期であろう。

#### (2) 第2号住居址 (第7～8・16・21～22図、図版4・11・16～17・22・24)

調査区の西側にあり、第1号住居址と第3号住居址の間に位置する。プランは隅丸方形で4.6×4.6 mを測る。壁高は斜面上となる東北側で50cm、斜面下の南西側で15cmである。幅20cm深さ

10~20cmの周溝が全周している。炉は中央北西寄りにあり、方形の掘炬鍵状石開炉である。炉石は平板な割石を立てて使用しているが西側は抜き取られている。主柱穴はP 1~4の4本である。また埋甕が住居址南東にあり、P 1とP 4の間が入口となる。床面上の覆土には5~25cmの厚さで多量の炭と焼土が含まれており火災等にあった住居址と思われる。

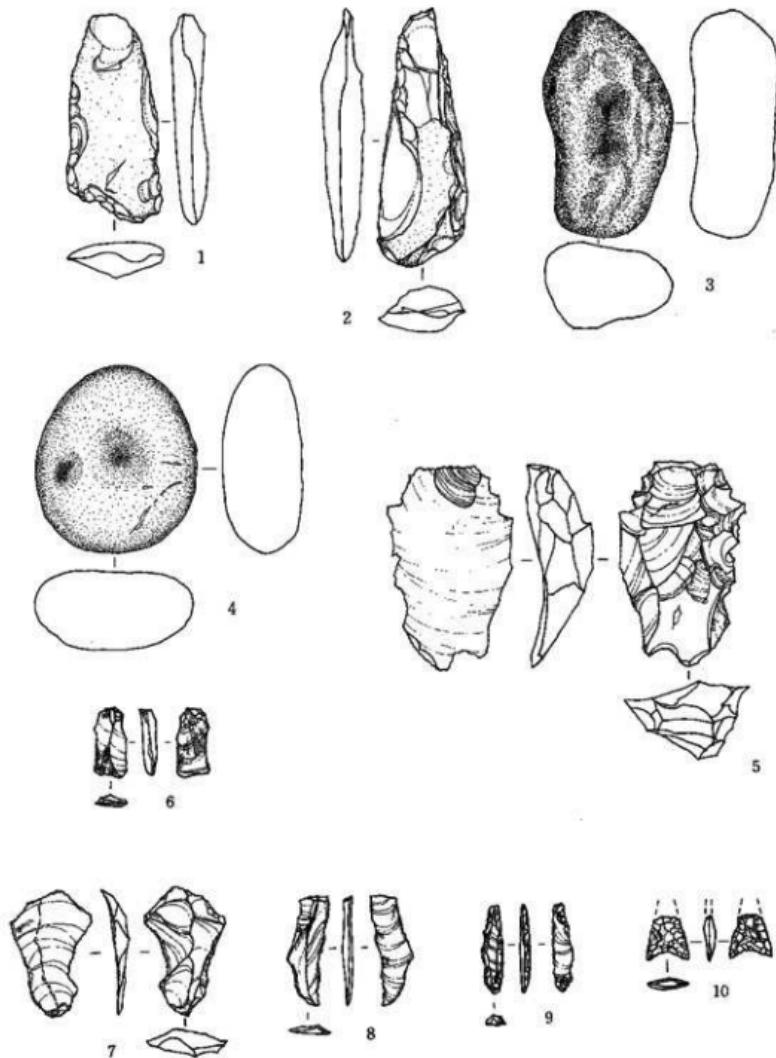


第7図 第2号住居址実測図 ( $S = 1 : 80$ )

埋甕断面は  $S = 1 : 10$

出土石器は、第8図中1が硬砂岩製、2が緑色岩製の打製石斧で、3が片麻岩製、4が硬砂岩製の両面に窪みをもつ凹石で、4は焼けており炭が付着している。5~10は黒曜石製で5・6が石核、7~9は剥片を加工しており、9は石錐、10は先端が欠損した石鏃である。

出土土器中復元できたものは第11図の埋甕として使用された土器のみで、口縁部を欠いた状態で埋められていた。加曾利E式類似土器で口縁部は連続入組文か窓枠状の区画をもつ土器であると思われる。外面には微妙に1.5~2cmの輪積痕が認められ、底径は7.5cmである。胎土混和材



第8図 第2号住居址出土石器  
(1~4はS=1:3, 5~8はS=1:2)

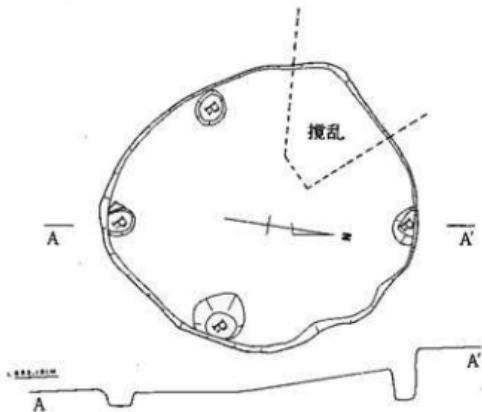
中には雲母が含まれている。文様は縦方向の縄文施文後沈線で区画しており、縦の区画は3単位おきにH字状の区画を配している。

土器片では第21図6~17と第22図1~14が出土しているが、第21図の6と10は縄文時代中期中葉末の焼町式土器で、7・9・11は中期後半期への過渡的様相を呈する中葉最末の井戸尻式の土器である。いずれも覆土中からの出上で本住居址に伴う土器ではない。同図中8は縄文時代中期後半の土器に付く渦巻を配した三角形の把手。12と16は深鉢の頸部に付くX字状の把手である。

第21図中の6も断面が三角形となる中期後半の把手である。同図中の10と12は地文が条線で、中期後半二期のものと思われるが、その他出土の土器はⅢ期であり、本住居址の所属時期はⅢ期である。

### (3) 第3号住居址 (第9~10・22図、図版5・17・22・24)

調査区の北隅にあり、第4号住居址の北、第2号住居址の北東に位置している。プランは隅丸



第9図 第3号住居址実測図 (S = 1 : 80)

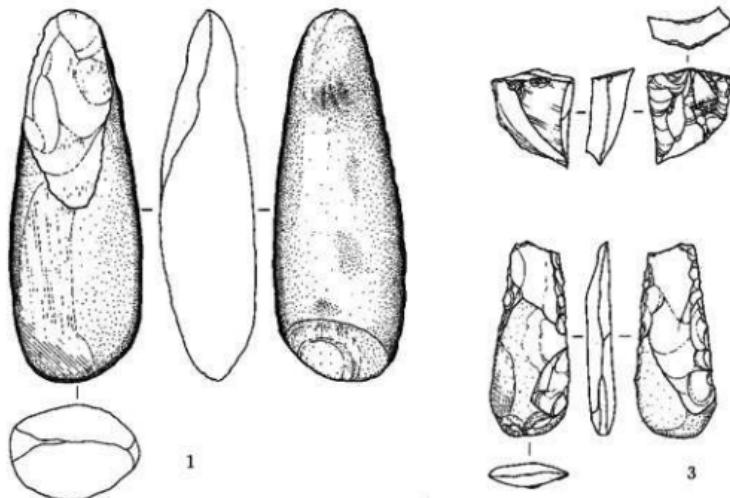
五角形で $4.2 \times 4.5\text{m}$ を測る。壁高は南西側が $10\text{cm}$ 、北東側が $20\text{cm}$ 程度。周溝及び炉はなく、本址は住居址として使用されていたのかどうかは不明である。主柱穴はP 1~4が残っているが、P 2とP 3の間に擾乱が入っていたため検出できない柱穴があると思われる。

柱穴の深さはP 1とP 2が $15\text{cm}$ 、P 3とP 4が $40\text{cm}$ 前後であった。

第10図で示した石器は、1が緑色岩製の大型蛤刃石斧で敲打整形の後に磨いてあり、重量は $1\text{kg}$ ある。2は黒曜石の石核、3は緑色

岩製の半磨製石斧である。

出土土器は小片ばかりで復元できるものはなく、第22図の15~23は覆土中からの出土である。18と20は縄文時代中期後半Ⅲ期の土器片である。17は同心円状の旋描き沈線を地文とする胴部が張る深鉢で、下伊那に多く見られるタイプである。23は木の葉压痕が残る底径 $8\text{cm}$ の深鉢底部である。本址の所属時期はⅢ期と思われる。



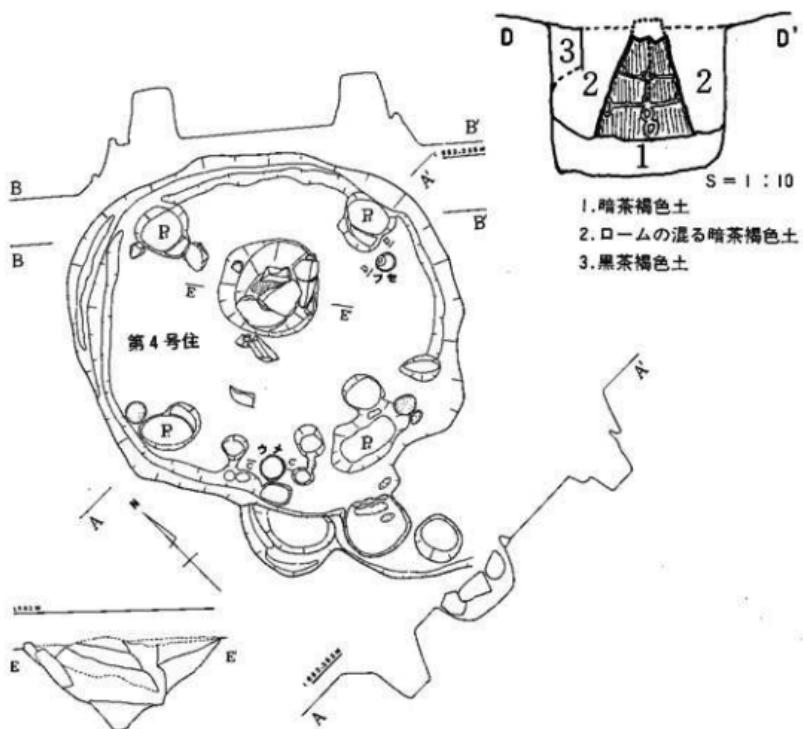
第10図 第3号住居址出土石器（1・3はS=1:3、2はS=1:2）

(4)第4号住居址（第11～14・16～19・23～27図、図版6～8・11～15・18～20・23～24）

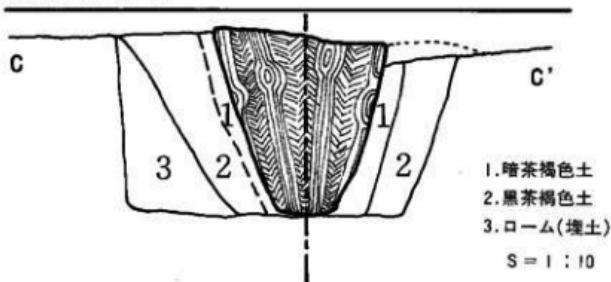
本住居址は調査区の南東にあり、第2号住居址の南東、第3号住居址の南、3号土塙の東に位置する。プランは北西側と南東がやや張り出す隅丸方形で $5.1 \times 5.6\text{ m}$ を測る。壁高は斜面上の北東部で60cm、斜面下の南西部で40cmである。周溝は深さ10～20cmで掘られているが、P2とP3の外側及び住居址の南側では途切れている。炉は掘炬煙状石圓炉で、炉石は炉内部に落ち込んだ形で出土した。また北側の炉石は抜かれている。掘り込みは円錐形に65cmの深さで掘られている。主柱穴はP1～4の4本であるがP4は周囲に掘られたピットのため形状をとどめていない。各柱穴の深さはP1とP4が60cm前後、P2とP3が70cm前後で、各柱穴とも住居址内部側に段差があり、柱穴の底から段差面まで差が30～35cm程ある。埋甕がP1とP2の間に埋められており住居址の入口は南東方向である。時期の異なるピット等が周囲にあるために判然としないが、埋甕の両脇や内側に径35cm深さ45cmのピットが2箇所あり、両ピットは周溝と幅10cm深さ10cm位の浅い溝でつながっていると思われる。第1次調査で検出された第3号住居址埋甕周囲にも同様のピットと溝があり、同じ施設を持つ点で興味深い。またP3の南側の径30cmのピット中に底部を欠いた状態で小型の土器が伏棗として埋められていた。

本住居址の造構の状況は以上のとおりであるが、住居址の南側には本住居址に伴わない土塙3ピット5があり本址を切っている。調査区外にかかったために詳細は不明であるが竪穴址か土塙群ではないかと思われる。

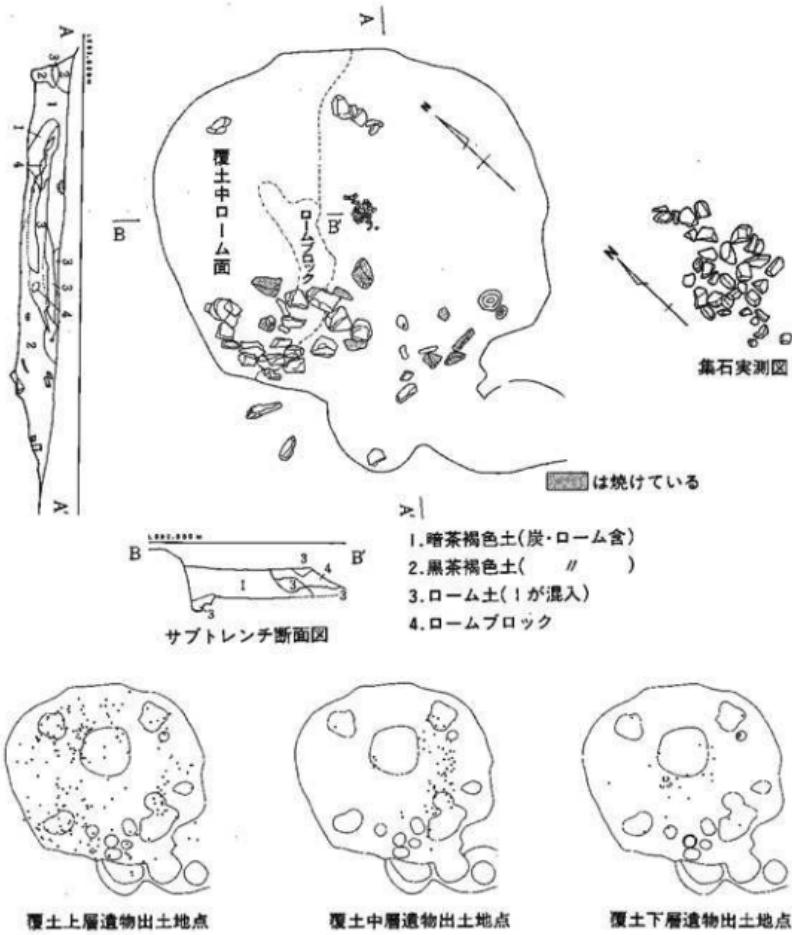
L 681.920 M



L 681.757 M



第11図 第4号住居址実測図



第12図 第4号住居址覆土状況

さらに本住居址の埋土や遺物も特異な状態であった。第12図及び図版5の2のとおり、住居址のほぼ北半の覆土中にやや固いローム土（小量の暗茶褐色土を含む）が入っていた。断面にサブトレンチを入れて観察したところ、明確な層位となっては現れずに、炭粒・ローム粒がわずかに混じる暗茶褐色土が床面から40cm程度堆積し、上部へ行くほどローム土の含有が多くなっていた。

また住居地の中央寄りの覆土の中にはローム土のブロックが入る所があった。解釈の一例としては住居址の窪みにロームが入れられた時に、周囲も踏み固められたということとも考えることができる。そして図示のとおりかなり多くの石が住居址西側の覆土中に入っていたが、これは焼けた石も含まれる点、石の重なり具合、また埋土の状況から住居址西側から投げ入れられたものである。

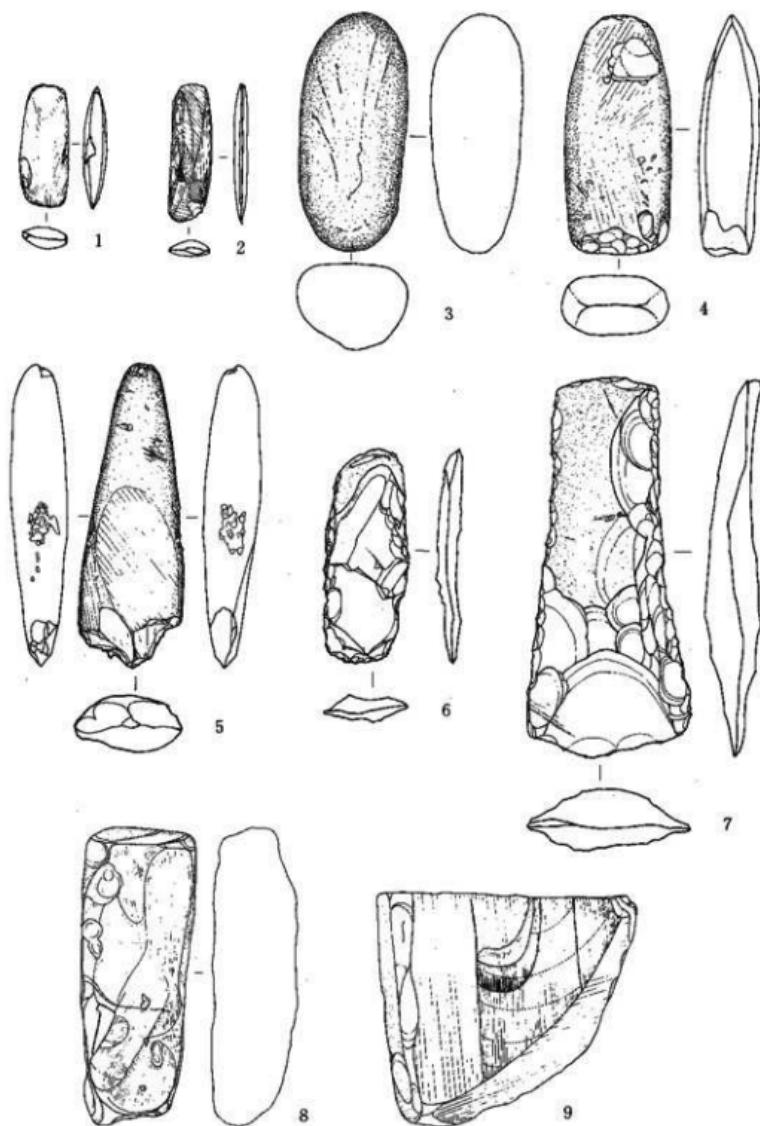
本住居址からは夥しい量の土器の出土があったわけであるが、遺物の出土は前述の覆土中ローム面より上のレベルで多く、ローム面より下は少ない。また覆土中ローム面の見られない住居址南半部では、上層から中層までのレベルで多量の土器が出土している。ただし住居址の南側の壁際での出土遺物は少なかった。以上の事柄を総合すると、住居の廃絶後の覆土中ローム面が形成された段階から、住居址北側からの土器投棄が行われたものと推測することができる。

この外に、炉址の西寄りの炉石が固ってある部分の上層で床面と同レベル位に集石が40×70cmの範囲に認められた。使用している石は6cm大位のものが多く、計70個の石が平面的に並べられていた。岩質は砂質の縞状片麻岩がもっと多く、緑色岩1個と近辺に産しない安山岩2個が含まれている点は注目に値する。炉の上部のため近くに炭が見られたが集石自体は焼けてはいない。炉より上に作られていることから住居址の廃絶後にこの集石も作られていると言うことができる。

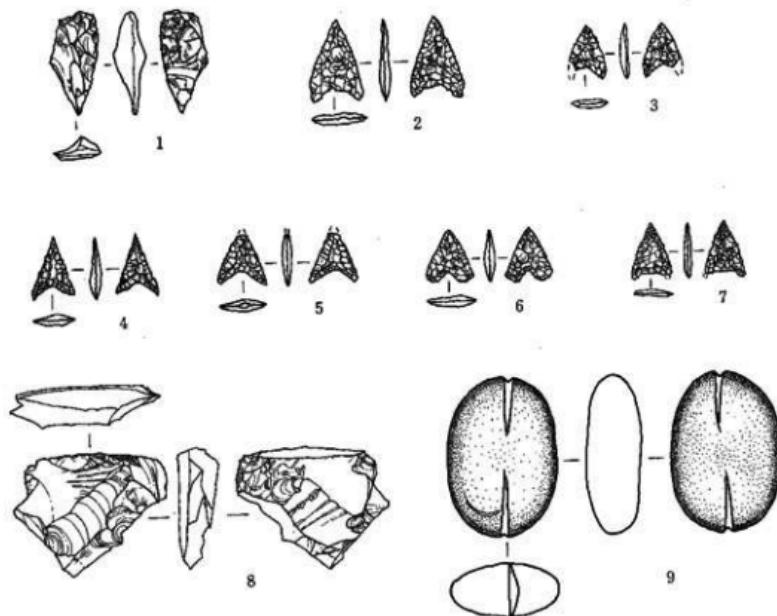
本住居址から出土した石器類には、第13図の1・2の緑色岩製の小型磨製石斧、3の硬砂岩製磨石、4・5の緑色岩製大型磨製石斧、6・7の硬砂岩製打製石斧、8・9の縞状片麻岩（砂岩）製の砥石と石皿や、第14図の黒曜石製石錐、2～7の石鐵、8の石核などがある。第14図の9の硬砂岩製石錐は住居址上部の造成により攪乱された表土中から採集されたものである。

本住居址からは前述したとおり廃棄が行われているので多量の土器が出土している。器形を復元できる土器は第16図の5～第19図までの11点であるが、いずれも縄文時代中期後半Ⅲ期の土器である。各土器の出土状況であるが、第17図の4の土器は覆土中ローム面の下で床面直上から出土しており、第16図の5の土器頸部土器片が逆位でこの七器の周囲を囲む形で出土している。第17図2の土器はP3柱穴の南ピットに伏謫として埋められていた。第18図1は埋謫として住居址入口部に埋められていた。また出土した土器片の中で器形が復元できる浅鉢は第19図に示した大きさの異なる3点であった。第20図の3は縄文時代中期後半Ⅲ期からⅦ期にかけてみられる釣手土器の釣手部の破片で、2つの円形の窪みと沈線が施文されており、裏側には支えが付く。

土器片は覆土中ローム面より上層で出土したものと第23図に、覆土中ローム面下から床面まで



第13図 第4号住居址出土石器 1(1~7はS=1:3、8・9は1:6)



第14図 第4号住居址出土石器 ( $S = 1 : 2$ ) (ただし9は住居址上の表土で採集)  
 の覆土出土上器を第24・25図に、床面直上で出土したものを第26・27図に図示したが、時期的な差異はなく全て中期後半Ⅲ期の土器である。本址出土土器を見て全般でいえることは、地文が範描き沈線あるいは棒状施文具による沈線で施文した深鉢が多く、それに地文に縄文をもつ加曾利E式類似土器が少量混じり、呪畠式など東海系土器の見られない点が特徴的である。また小型の土器は大型土器に比してかなり施文が粗雑になっている。

本址は覆土中ローム面下出土の土器、埋甕、伏甕など出土土器全てが同時期のもので、所属時期は縄文時代中期後半Ⅲ期である。

##### (5)第5号住居址 (第15・20・27図、図版9・15)

調査区の南隅にあり、第1号住居址の南、第4号住居址の南西に位置する。本住居址の東側には土塙1～3号が南北方向に並んである。住居址の南から西にかけて半分以上が造成工事のため壊されていたためプラン等不明である。壁高は北側で10cm程で、周溝は幅20cm深さ5cm程度で掘られている。主柱穴はP1～3が残されており、深さはP1が21cm、P2が24cm、P3が12cmで

ある。住居址内に残された石はP1脇の石が砂岩、P3脇が花崗岩、その他の2つの石は砂岩で焼けていた。

また住居址東のP2とP3との間の周溝のすぐ近くには大型の深鉢が埋甕として埋められていた。第20図の1がその土器で、口縁部には連続入組文を配し胴部は細条線の施文となっている。

口縁部文様は墜帶で入組を表わし、渦巻の上または下に3本のヒゲ状の文様が付き、沈線部は半裁管施文具による連続押引文となっている。器形は加曾利E式土器によく見られる形であるが在地で作られた土器であり、時期はII期であろう。

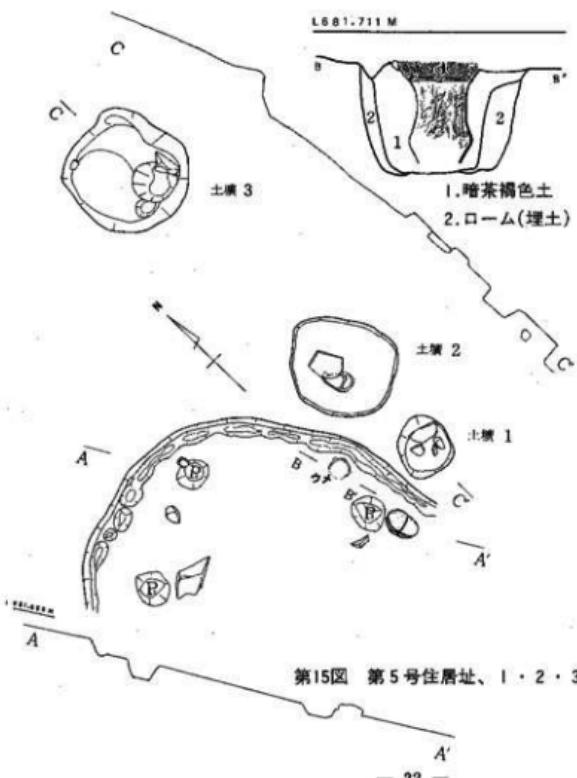
#### (6) 第1・2・3号土塙 (第15・28図、図版10・21)

第1、2、4、5、号住居址の間にあり、5号住の東側に南北方向で3基並んでいる。1号土塙は形状が隅丸の北がやや張り出す五角形で75×85cmを測り、断面形はタライ状の掘り込みで深さは30cm。砂岩の石が4個落ち込んでおり内1個は焼けている。出土遺物は小上器片が5点、黒茶褐色土より出土している。2号土塙は西辺がやや狭い隅丸方形のプランで、深さ30cmのタライ

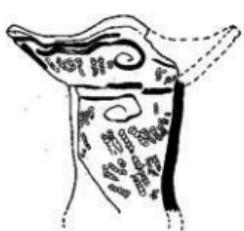
状土塙である。中央付近に平らな石が2つ重っており、下の石は焼けて擦った痕が見られた。

土器の出土は1点のみ。3号土塙は円形に近い隅丸5角形のプランで160×170cmを測るタライ状土塙である。深さは25cm前後で、南側の底部には径55cmと15cmの大小のビットが認められ、深さは20cmと10cm程度であった。

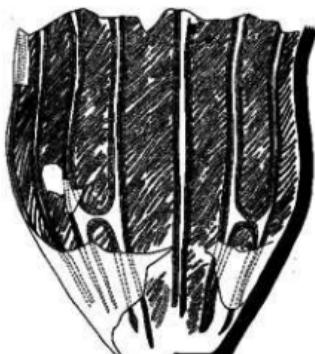
出土遺物は土器小片が15点、黒褐色覆土中より出土しており、時期は中期後半II～III期と思われる。



第15図 第5号住居址、1・2・3号土塙実測図 (S = 1 : 80)



1



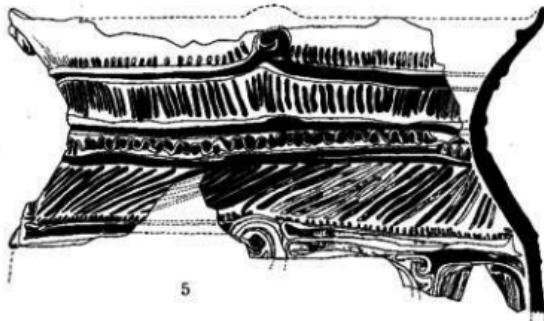
2



3



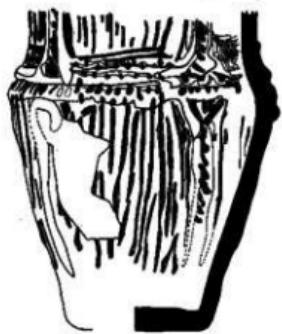
4



5

第16図 第1・2・4号住居址出土土器

- 1.第1号住居址出土(1:3) 3.4.第4号住居址出土(1:3)  
2.第2号住居址出土(1:4) 5.第4号住居址出土(1:4)



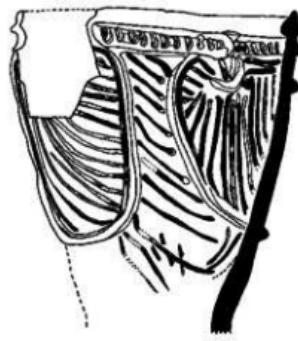
1



2



3

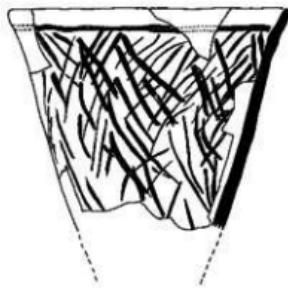


4

第17図 第4号住居址出土土器 1・2・4(1:3)  
3(1:4)



1

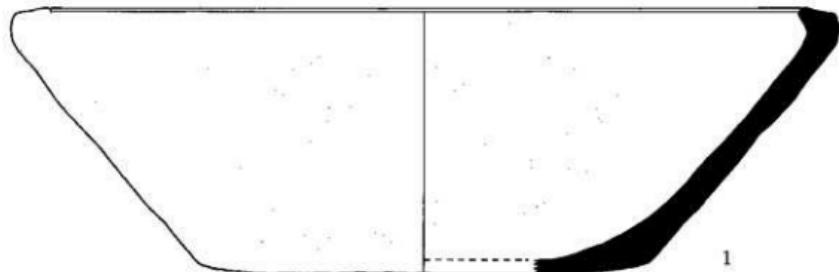


2

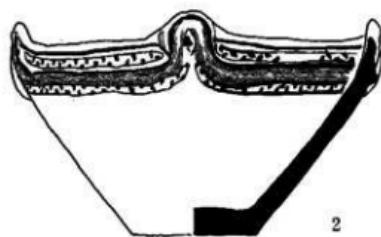


3

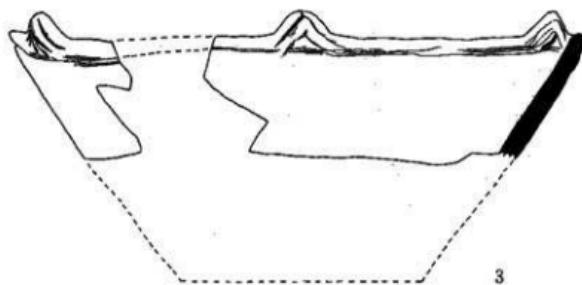
第18図 第4号住居址出土土器 1・3(1:4)  
2(1:3)



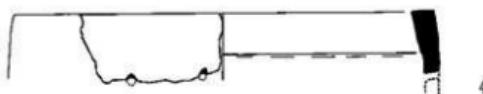
1



2

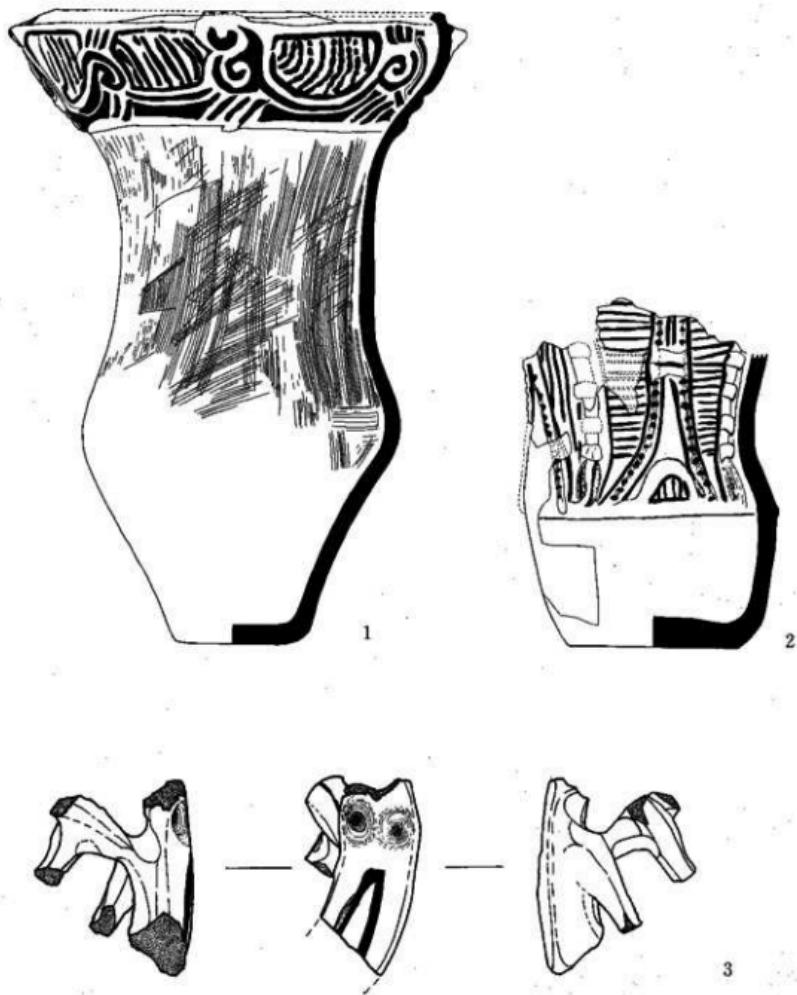


3



4

第19図 第4号住居址出土土器 3 (1:3) 4は有孔土器



第20図 第5号住居址・遺構外・第4号住居址出土土器

1. 第5号住居址出土(1:4)
2. 遺構外出土(1:4)
3. 第4号住居址出土(1:2)



第21図 第1・2号住居址出土土器( $S = 1 : 3$ )

1~5は1号住、6~17は2号住



第22図 第2・3号住居址出土土器( $S = 1 : 3$ )

1~14は2号住、15~23は3号住



第23図 第4号住居址覆土上層出土土器( $S = 1 : 3$ )



第24図 第4号住居址廬土中層出土土器 I (S = 1 : 3)



第25図 第4号住居址覆土中層出土土器2 (S = 1 : 3)

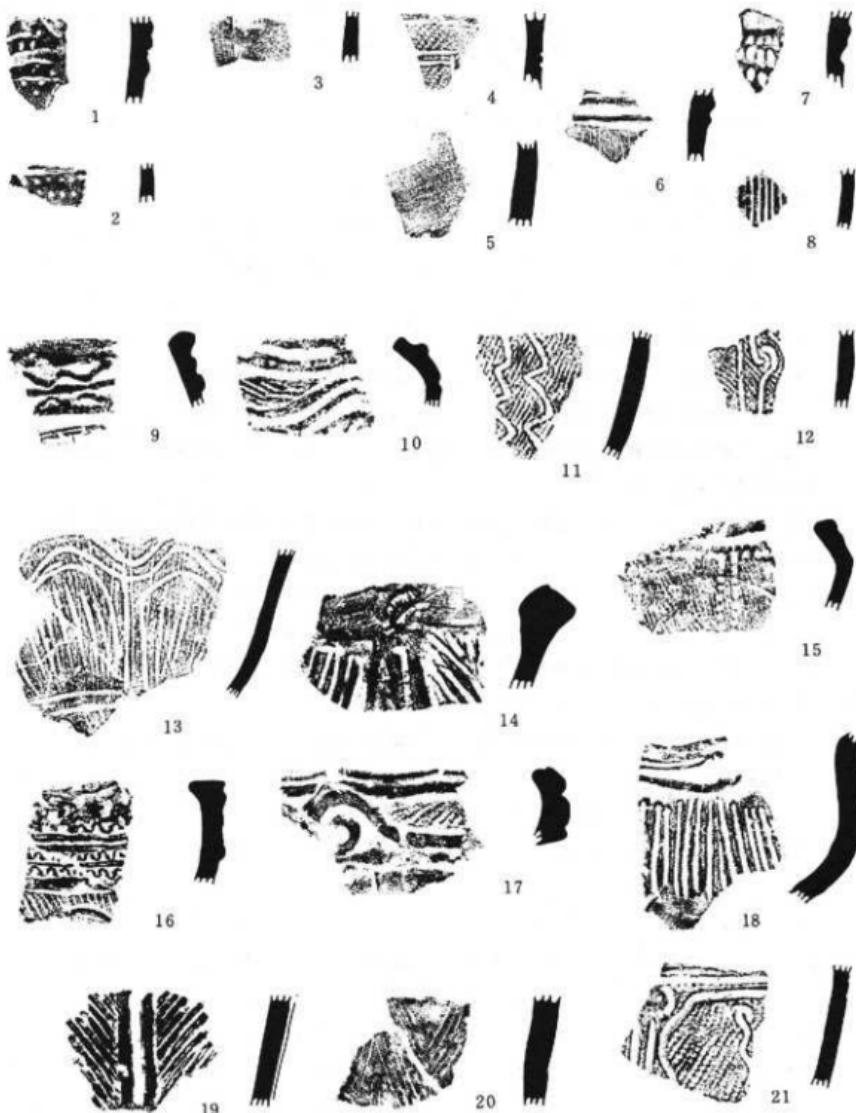


第26図 第4号住居址覆土下層出土土器( $S = 1 : 3$ )



第27図 第4号住居址覆土下層、第5号住居址出土土器 (S = 1 : 3)

1~7は4号住、8~18は5号住



第28図 土塙・遺構外・表面採集出土土器 ( $S = 1 : 3$ )

1～2は1号土塙、3は2号土塙、4～8は3号土塙

9～12は遺構外、13～21は表採

## 第Ⅳ章 まとめ

今回の調査で検出した遺構と遺物については前述のとおりであるが、若干の問題点を提起してまとめて換えたい。

検出された遺構は住居址5軒と土塙4基であるが、内第2号住居址と記した遺構は炉と周溝が見つからず住居として使用されたかどうか不明であり、竪穴址としてとらえるべきかもしれない。

また調査区外となつたため詳細は不明であるが、第4号住居址の南側は何らかの遺構によって切られていると思われる。

住居址の中で第1号住居址と第2号住居址とは床面上に炭や焼土が認められ火を受けた住居であった。注目されるのは第4号住居址で、多量の土器が出土し、住居廃絶後に廃棄が行われたとみられる。廃棄面で検出した集石は祭祀に関係する遺構であった可能性も指摘しておきたい。

出土した遺物は若干縄文時代中期中葉のものが混じっていたが、ほとんどが縄文時代中期後半II～III期のものであった。

第1次調査で明らかになった遺構・遺物も同時期のもので、第1次調査で検出された第3号住居址埋蔵の両脇のピットと小溝が、今回の第2次調査の第4号住居址に伴う埋蔵周辺にも見られ、両住居群は密接な関係にあると言うことができる。両地区の中間地域は未調査で明らかになっていないが、同一の集落とすると「こうろじくば」と呼ばれる小谷を取り巻く形で集落が存在していたこととなる。第1次発掘調査結果の再検討と今回の第2次調査での事例との関係については今後の研究に期したい。

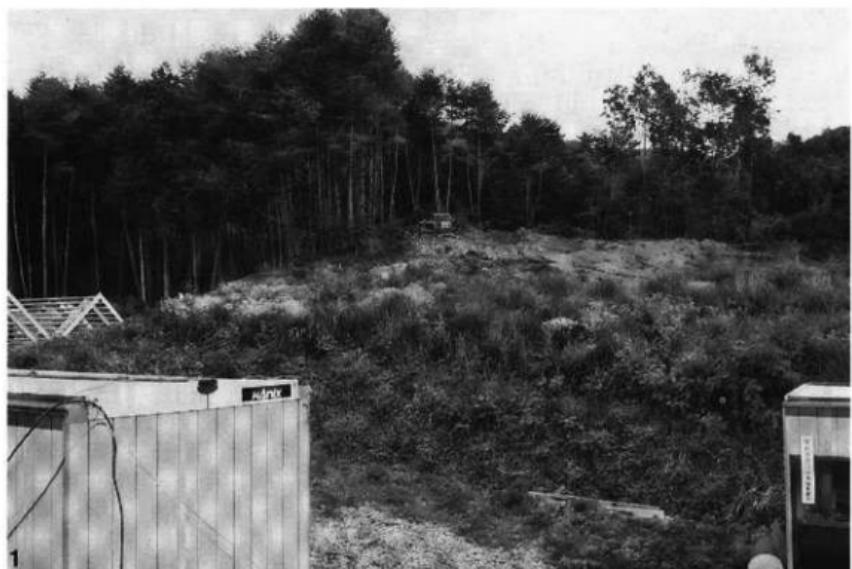
なお、第1次調査から40年余の歳月の後に今回の第2次調査が緊急に行われたわけですが、第1次調査と同様に地元の方々の多くのご協力のもとに今回の調査が無事実施できましたことについて深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

以上、浅学のため十分な調査報告となっていない部分もあるうかと思いますが、今後の研究の一助となれば幸いです。

### 〔参考文献〕

- 友野良一他「長野県上伊那郡伊那村遺跡 第一次調査概報」『信濃』第三卷第六号 1951年  
〃 「長野県上伊那郡伊那村遺跡 第二次調査概報」『信濃』第四卷第十一号 1952年  
米田明訓 「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」甲斐考古17の1 1980年  
田中清文 「伊那谷縄文中期後半土器編年への展開」『中部高地の考古学III』 1984年

その他多くの文献を参考にさせていただきました。



調査前状況 西から



調査前状況 東から



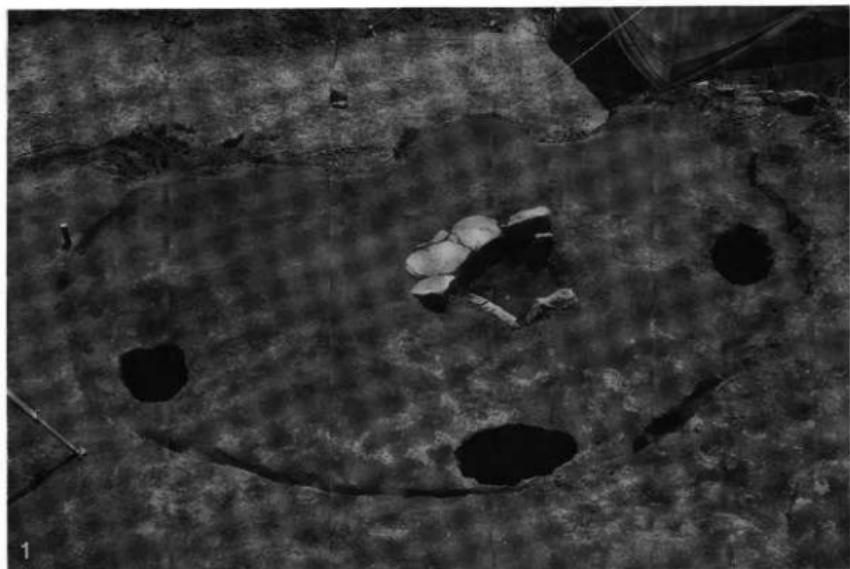
1

調査前状況 造成段差



2

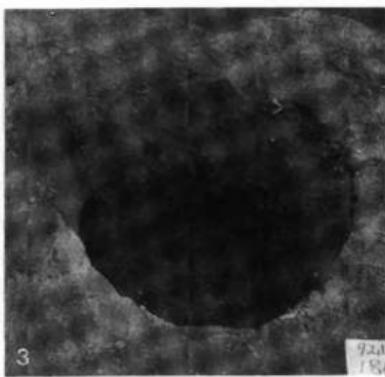
住居址群



第Ⅰ号住居址



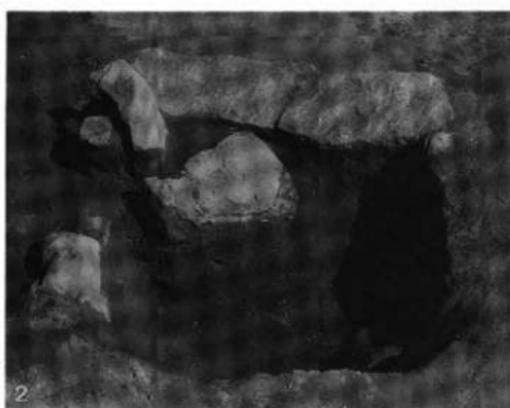
炉址



柱穴



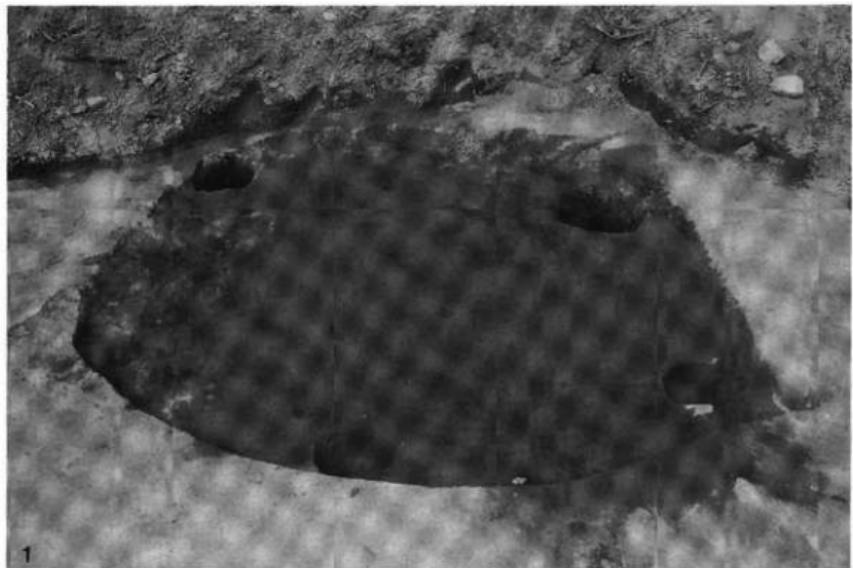
第2号住居址



炉址



埋壙



第3号住居址



第4号住居址（覆土調查中）

图版 6



第 4 号住居址



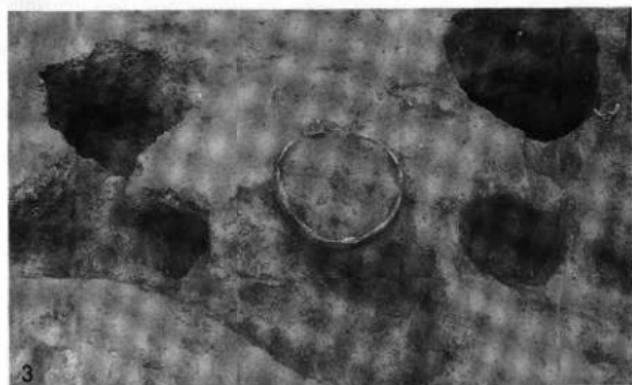
第 4 号住居址遗物出土状况



1



2

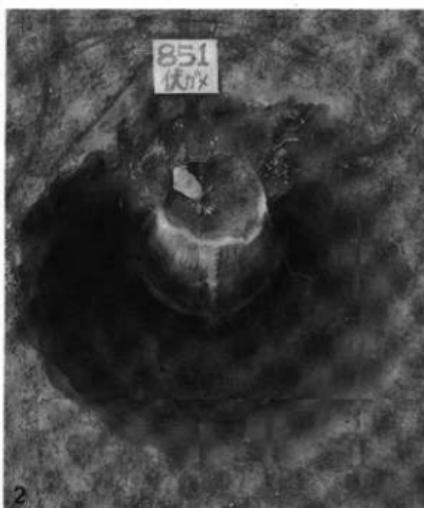


3

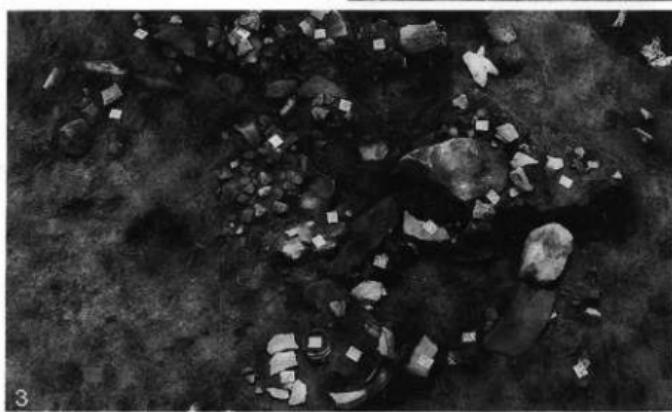
第 4 号住居址 1. 炉址 2. 炉底 3. 埋甕



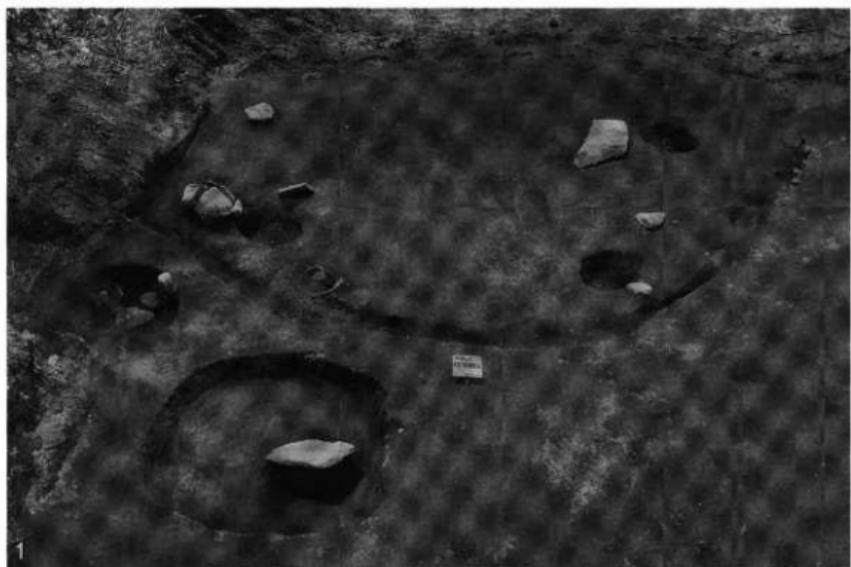
埋甕



伏甕



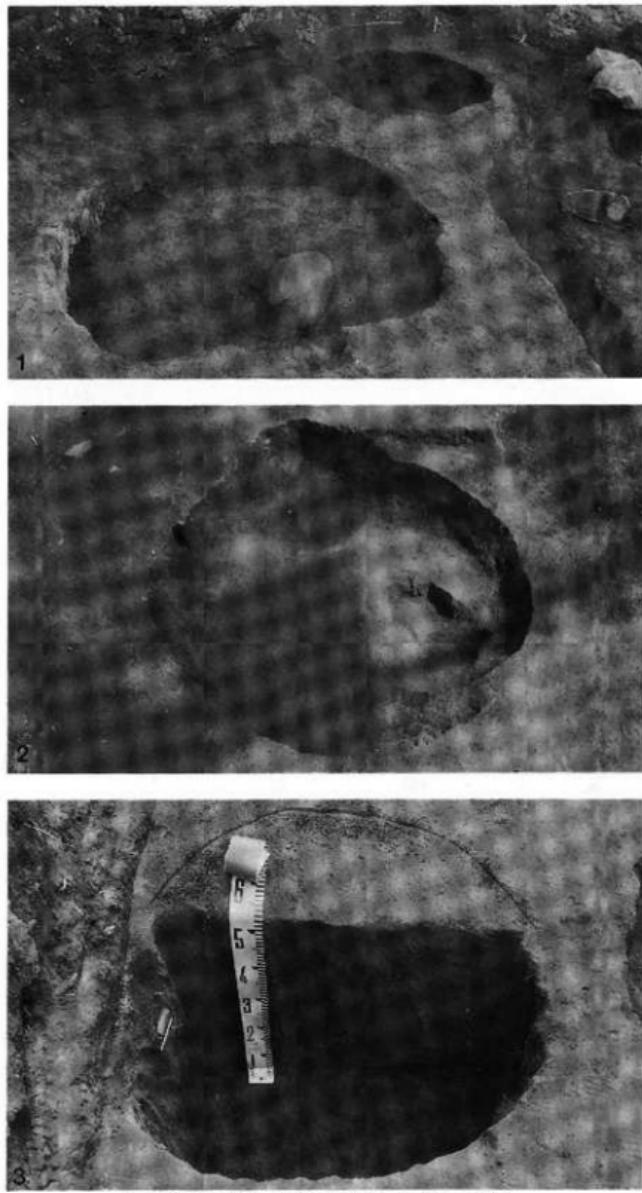
第 4 号住居址 集石と土器出土状況



第 5 号住居址



第 5 号住居址埋器



1.第1·2号土堆 2.第3号土堆 3.第4号土堆



1



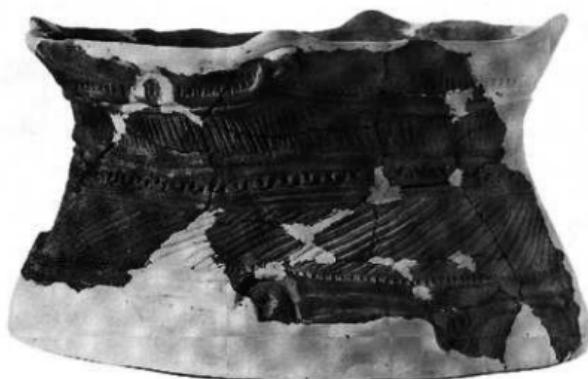
2



3



4



5

1.第1号住居址出土土器 2.第2号住居址出土土器 3~5.第4号住居址出土土器  
(1・3・4はS=1:3, 2・5はS=1:4)



1



2



3



4

第4号住居址出土土器( $S=1:3$ )



1



2



3

第4号住居址、出土土器(1はS=1:4, 2・3はS=1:3)



1



2



3

第4号住居址出土土器( $S = 1 : 3$ )



1



2



3



4

1.第5号住居址出土埋甕(1:4) 2.住居外出土土器(1:4)  
3.4.第4号住釣手土器(1:1)



1



2

1. 第1号住居址出土土器 2. 第2号住居址出土土器



1



2

1.第2号住居址出土土器 2.第3号住居址出土土器



1



2



3

1.2. 第4号住居址上層出土土器 3. 中層出土土器



1



2

1. 第4号住居址中层出土土器 2. 下层出土土器



1



2

1.第4号住居址下层出土土器 2.第5号住居址出土土器